

## WAY プロジェクト(校内道德教育推進委員会)レポート・6 2019・10/17(木)

今回は PTA 会長の石口さんのお誘いで、本校卒業生の中西秀輝さんが参加くださいました。中西さんは普段は会社員をされ、それ以外に「子どもたちに輝きを委員会」という活動をされています。その中で子どもたちが、自分で考えて自分で行動するようになるにはどうしたらいいのかという問題意識で、ご参加くださいました。

また本校運営協議委員の、仲川雅博さんもお参加くださいました。仲川さんも本校を卒業された大先輩で、地域で「中学生友の会支える会代表」をされており、本校教育にいつもご尽力くださっています。今回は、子どもたちの学びを一緒に作ろうということで、ご参加くださいました。

また、関西における人権問題研究者が中心となり発足された「じんけん SCHOLA」の講演の場で、「人権教育から見た道德教育」というテーマでお話しされた土屋貴志さんと出会わせていただきました。そして、地域と共に道德教育を作っていくという本校の取り組みに興味を持っていただき、今回ご参加いただくことになりました。

土屋貴志さんの簡単なプロフィール(土屋さんのホームページより)

1994 年4月より 大阪市立大学文学部教員(現在 大学院文学研究科准教授)

(1997 年3月3日～1998 年3月2日 大阪市立大学在外研究員により米国ワシントン DC・ジョージタウン大学ケネディ倫理学研究所に客員研究員として滞在)

2000 年4月より 大阪市立大学人権問題研究センター兼任研究員

2002 年4月より 大阪市立大学医学部医学科・大学院医科学研究科専門科目「医療倫理学」兼担専攻:倫理学(道德哲学。とくに、倫理学基礎論、医療倫理学、人権論、道德教育論)

さらには、PTA 会長の石口さん、運営協議会会長の仲川久仁子さん、吉野高校で道德を担当されている森本さん、PTA 協議会の斎藤さんと、日頃様々な場所で活動されている方々がご参集くださり、多様な議論を行うことができました。

以下、内容です。



## C13 勤労

勤労の尊さや意義を理解し、将来の生き方について考えを深め、勤労を通じて 社会に貢献すること

今回のテーマは、「勤労」です。

まず本校では2年生時に職業体験を行い、キャリア教育を取り扱っているのですが、今年度2年生でキャリア教育の授業を担当した高砂さんから、本校の生徒が持っていた勤労観について話されました。

「勤労というと、どうしてもお金のためとなっていました。それか、自分のしたいことや、好きなことをしたいと言っていました。ここに書かれているような自分の務めとして、身も心もつかって働くというようなイメージを持っている生徒は、少ないというのが現状かなと思います。」

それに対して、本校卒業生のお話が聞かれました。

「本校卒業生の一人の女の子は、日々の労働の中で共に働く人たちとのコミュニケーションをとっても大切にしています。海外から来て、言葉がほとんど通じない人とも、笑いながら楽しく労働をしているそうです。またその子は、自分のチームや仕事にすごくプライドを持っていて、決して日が暮れて終わりというような仕事の仕方はしていません。望む場所かそうでないかに関わらず、させられているのではなく、自ら決めてしているというのが大切なのではないかと思います。」

ここで土屋さんから、次の問題提起がなされました。

「指導要領に書かれている内容には、例えば今、災害で水浸しになっている所に行っているボランティアの人のように『自分の生きがいや人の役に立つ』という内容と、『生産性』という内容の2つが入っているのではないかと思います。その相反する側面を持つ内容が、整理されないまま混在しているのではないのでしょうか。働ける・働けない、稼げる・稼げないって、どういうことなの？ということをよく考えて充実させないといけないのではないのでしょうか。」

次に斎藤さんから

「ここに来る前にPTA協議会に参加してきましたが、参加者はみんな仕事を休んで来ていました。勤労ではないわけです。でもそこに、生きがいややりがいをみんな感じています。勤労を通じてやりがいや生きがいとここには書かれていますが、それだけに限らないと思います。趣味のピアノで人を楽しませている人も、社会に貢献していると思います。アーレントを読んでいると、そこには『労働』と『仕事』と『活動』と書かれていて、自分のPTA活動もアーレントに書かれている『活動』に入るのではと考え救われ、一生懸命やってみようと思い直せました。だから、仕事でお金を稼ぎながら社会に貢献しなければならないと限定され、縛られる必要はないのではないかと子どもたちに伝えていく必要があるのではないかと思います。」

とありました。

齋藤さんの話を受けて、土屋さんからは  
「アーレントはアリストテレスを念頭においていて、アリストテレスはお金を稼ぐことは下劣なことで、一番いいことは自分の優れた性質を発揮させること番で、それを『活動』だと言っていました。それは現代から考えると浮世離れしているかもしれないが、自分の優れたやりたいこと、やれること、役に立つことをやっている楽しさと、稼がなきゃダメなの？家事労働や介護などの賃金にならない労働は労働じゃないの？ということ、やっぱり考えていかなければならないと思います。」とありました。

そこから、本校生徒たちの、日頃の学級での様子のお話になっていきました。  
「本校では、集中ホームルームなどを通しての学級集団づくりや、生活班での関わりを大切にしていますが、子どもたちは自分の役割以外でも、声かけや関わりを大切にしています。例えば授業で分からないとを教えあったり、ノートや提出物をするよう声をかけあったり、当番活動もスムーズにできるように工夫しあったりします。その時には、たとえ自分の利益にならないことでも、やれること、役に立つことを自然と行動に移し、お互い助け合っています。」  
このことについては、どの学年、どの学級にも共通する姿でした。

さらに会社員として日頃お勤めの石口さんからは、  
「やっぱり、家族を食べさせていけないといけなから、お金は大事ですね。それは家族を守ることに繋がるから。でもその場所で、自分のやりがいであったり、周りの人たちとの繋がりであったりに気づき、大切にしようようになっていきました。でもやっぱり、入り口はお金でした。」  
続いて中西さんから、  
「子どもたちには、もっといろんなことを学ばせてほしいです。お金のこともそうだし、こんな世界もあるんだと、夢見ることができるような世界も中学生の時に見せてあげて欲しいです。」  
というお話がありました。

やりがいであったり、つながりであったり、いろいろなことはあるけれども「お金や生活のため」、「社会貢献のため」、「自分の夢の実現のため」など、一番大切にしていることは一人一人違うということも確認されました。

最終的には、勤労について考えることは、自分の生き方について考えることにつながるのではないかと結論に至りました。

今回も今まで同様に、多様な立場の方から多様な意見が出され、白熱した議論が繰り広げられました。次回は C14「家族愛、家庭生活の充実」の項から W AY プロジェクトで議論をしていきます。

(文責:松浦)